

1~3面 サロー節子さんメッセージ

- 4~5面 YWCAの東日本大震災被災者支援
- 6面 ひろしまを考ふる旅
- 7面 パレスチナのリアル

2017年12月、オスロで開かれたノーベル平和賞授賞式で、被爆者として初めて演説をしたサロー節子さん。トロント在住のソーシャルワーカーであり、核兵器廃絶を世界に訴え続けるアドボケーター、原爆で亡くなった人々の代弁者でもある。この日、オスロから世界へ発信された被爆者の声は大きな反響を呼び、核兵器に関心のなかった人々にも共感の輪を広げた。2018年秋、サローさんは日本を訪れて私たちに訴えた。信念を貫くその姿勢に学び、思いを受け止め、共に世界を変えて行こう。

2

February 2019 No.748

The Young Women's Christian Association

YWCA

(第32総会期主題聖句)  
平和を実現する人々は幸いです  
—マタイによる福音書5章9節—

(日本YWCAの使命(ミッション))  
イエス・キリストに学び、共に生きる世界を実現する  
世界の人々と共に人権・平和・環境の問題に取り組む

(日本YWCAのビジョン)  
地域で女性達が主体的に活動することを通して、  
以下の社会をめざします。

- (1) 平和憲法が生かされ、核も暴力もない社会
- (2) 女性と子どもの尊厳を守る社会
- (3) 若い女性がリーダーシップを発揮する社会
- (4) 多世代・多文化で多様な背景を持つ人びとを尊重する社会

www.ywca.or.jp

核のない世界へ  
あの光に  
向かって進め

Setsuko Thurlow

お母さん助けて

サロー節子(旧姓 中村節子)さんの原点は、広島女学院時代にある。1944年、英語と音楽に惹かれて12歳で広島女学院高等女学校(当時)に入学。2年生になると毎日のように生徒動員に駆り出された。1945年8月6日、同級生と共に動員先の軍施設で被爆した。爆心地から1・8キロ。すさまじい閃光に包まれ、身体が吹き飛ばされた。気がつくとも目の前は真っ暗で、がれきに阻まれて動きがとれずいた。死を覚悟したとき、誰かに左肩をつかまれた。

「諦めるな、踏ん張れ。あの隙間から光が見えるだろう。そこに向かって這って出るんだ」。軍人らしきその声に押されるように、懸命に這い出た。猛火が迫るなかで同級生たちは崩壊した建物の下敷きになったままだった。「神様助けてください」「お母さん助けて」かすれる声が、今もサローさんの耳に残っている。

13歳のサローさんが見た光景は「想像を超えた破壊」「地獄絵そのもの」だった。皮膚や肉片が垂れ下がった人、腹から内臓が飛び出している人、自分の目玉を持った人……。おびただしい死体を踏まないように

必死で逃げた。

怒りと行動の原点

家族と会うことができたものの、姉とその息子である4歳の甥は数日後に亡くなった。皮膚がむけ、顔が何倍にも膨れて無残な姿になって茶毘に付された。「まだ腹が焼けてないぞ」などと言いながら兵隊が遺体に石油を撒いて竹竿で転がす様子を黙って見ているしかなかった。

敗戦を迎え、秋には授業が再開したが、広島女学院では原爆によって351名の命が奪われた。助かった生徒たちは病と死の恐怖に脅かされていた。目を追うごとにクラスメイトが減っていく。サローさんも脱毛や出血に苦しみ、斑点がないかと全身を確認するのが日課となった。

一発の原爆が、人間の尊厳を一瞬にしてずたずたにした。被爆体験は「怒りと行動の原点」になった。

「愛と行動の人」になる

一方で、サローさんは生き残った意味を探し求めていた。「自分はなぜ生きているのか。残された者の役割はなにか」。問い続けるなかで道しるべとなったのが、キリスト教であり、学校や教会の人々との出会だった。

エンパワーするNGO



「ヒバクシャ国際署名」にご協力をお願いします

核兵器廃絶を求め、世界の世論をつくらう！



世界には約1万5000発の核兵器があります。2016年、平均年齢80歳を超えた被爆者たちは、「生きていく間になんとしても核兵器のない世界を実現したい」と切望し、「ヒバクシャ国際署名」を始めました。本紙の巻頭で紹介しているサロー節子さんも呼びかけ人の1人です。

そして2017年、被爆者の声は長い年月を経て、核兵器禁止条約採択へと突き進みました。しかし、この条約が正式に効力をもつためには、50カ国の批准が必要です。批准とは、各国の国会が承認することです。2018年10月現在、批准した国は19カ国。残念ながら日本政府は、当面の間、批准する見込みがありません。この条約に背を向けている核兵器保有国、そうした国と軍事同盟関係にある非保有国が姿勢を変えるよう、働きかけなければなりません。日本YWCAは、「ヒバクシャ国際署名」の推進連絡会に加盟し、国内外の多くの人たちに広く署名を呼びかけています。署名運動の推進に、ご協力をお願いいたします。

日本YWCA  
ウェブサイトから  
署名用紙を  
ダウンロードできます

DOWNLOAD PDF

<http://www.ywca.or.jp/pdf/2017/0829a.pdf>

ヒバクシャ国際署名

<https://hibakusha-appeal.net/>

※2020年まで毎年国連に届けています。署名は1人1回のみ

ご協力ありがとうございます

- 賛助費
- 実生律子 田中輝彦 石井寛治
  - 尾崎敦子 松岡信子 村松幸子
  - 原紀子 三宅香織 江尻美穂子
  - 河崎純子 萩山淳子 仁木三智子
  - 仙波容子 八木高子 帆足嘉代子
  - 北原恵美 熊江雅子 藤井野百合
  - 小坂宣雄 熊江雅子 武内富貴代
  - 渡邊順子 国中正人 中尾貴三子
  - 野澤節子 伊藤恵子 清水嶋洋子
  - 杉本陽子 河津百合 小谷野淳子
  - 松本彰雄 石原清美 田村恵美子
  - 三宅純子 毛利亮子 高岩由美子
  - 小村明子 帆足道子 渡辺寿美子
  - 馬場元毅 岸田晃子 中平多恵子
  - 河村双葉 秋元靖子 加納美津子
  - 古藤春世 野呂幸子 木下由美子
  - 武原要子 白田治子 小野寺富子
  - 井田すみ 森田矩子 八重樫照代
  - 福田智子 西田和子 小野寺富子
  - 本城智子 石川松子 谷山久美子
  - 阿部有三 小泉迪子 赤石めぐみ
  - 深田光代 福島和子 三股まさ子
  - 青木恵子 篠原洋子 田中美紗子
  - 日本学園高等学校  
まきば幼稚園
- ピースメーカーズ基金  
(平和をつくり出す女性のリーダーシップ養成)
- 実生律子 梶山順子 仁田俊子
  - 桐村巨子 石井寛治 葛屋陽子
  - 松山逸子 北原恵美 八木高子
  - 熊江雅子 渡邊順子 藤本和子
  - 岡本妙子 岡本和子 荒木悦子
  - 森本晴生 関根結子 本山幸子
  - 高徳芳忠 金井淑子 石川玲子
  - 出岡健 森田健司 江尻美穂子
  - 池田操 坂内義子 仁木三智子
  - 篠田茜 小村明子 渡辺めぐみ
  - 毛利亮子 浅原由美 尾崎裕美子
  - 久我輝子 糸みち代 中尾貴三子
  - 手島千景 古藤春世 清水嶋洋子
  - 松本幸子 川崎美子 小谷野淳子
  - 安藤裕子 安藤英男 堀内香代子
  - 青山喜八 青山静子 長尾眞理子
  - 白田治子 板橋幸子 黒崎水香里
  - 安江恵津 安田寛子 中西トク子
  - 野崎昭弘 寺島順子 近藤眞由美
  - 田中まさき 吉野恵子 八重樫照代
- 青木恵子 川上静子 横田千恵子
- 笹木直子 桃井明男 田崎かほり
- 藤田洋子 藤沢淳子 石塚多美子
- 三股まさ子
- 西南学院中学校・高等学校
- 学校法人活水学院
- フエリス女学院中学校・高等学校
- 東洋英和女学院大学
- 学校法人女子学院
- とわの森二愛高等学校
- 日本キリスト教団新津教会
- 日本キリスト教団鎌倉谷教会
- 日本聖公会東京教区聖パウロ教会
- 宗教法人大日本キリスト連盟
- 矯風会高教グループ
- 横浜YMCA/YWCA合同祈禱献金
- 創路YWCA
- 甲府YWCA
- 新潟YWCA
- 匿名
- 世界YWCA総会派遣基金
- 吉田亜希
- 匿名
- 災害時支援基金  
(国内外の災害被災者支援)
- 江尻美穂子
  - 日本キリスト改革派東京福音教会
  - 執事会
  - 静岡YWCA
  - 公益財団法人名古屋YWCA
  - 公益財団法人神戸YWCA
  - 熊本YWCA
- (オリーブのキャベツ)基金
- 川上哲 池田操 小田綱 坂和優
  - 梶山順子 桑原貴子 榎本みづ枝
  - 田中良明 荒井重人 中尾貴三子
  - 石井寛治 尾崎敦子 清水嶋洋子
  - 松岡信子 上田京子 小谷野淳子
  - 国中正人 萩山淳子 友田シズエ
  - 北原恵美 田崎桂子 長尾眞理子
  - 熊江雅子 浅原千代 高岩由美子
  - 小村明子 阪本和子 神門佐子
  - 久我輝子 糸みち代 八重樫照代
  - 小宮一子 古藤春世 横田千恵子
  - 野呂幸子 林育一郎 仁平のぞみ
  - 白田治子 野々村耀 重松よし子
  - 下口朋子 西田悦子 石塚多美子
  - 笹木直子 桃井明男 三股まさ子
  - 月原綾子
- Rupert Martin  
匿名
- (北海道地震被災者支援基金)
- 原紀子 外山真理 石橋さなえ
  - 篠田茜 吉田亜希 川戸れい子
  - 実生律子 町田洋子 仁木三智子
  - 美生祐子 小池桂子 岩城紀代子
  - 細川敦子 萩山淳子 内田かおり
  - 中村みゆき 太田ゆかり
  - 日本バプテリスト連盟多摩川キリスト教会
  - 日本聖公会静岡聖ペテロ教会
  - 福島YWCA
  - 一般財団法人平塚YWCA
  - 静岡YWCA
  - 公益財団法人神戸YWCA
  - 匿名
- 東日本大震災被災者支援基金
- 戸叶幸子 江夏一彰 桐村巨子
  - 桑原貴子 村松幸子 仙波容子
  - 熊江雅子 野澤節子 杉本陽子
  - 藤本和子 森田健司 江尻美穂子
  - 松田和子 小村明子 仁木三智子
  - 毛利亮子 玉生邦子 藤井野百合
  - 久我輝子 秋元靖子 武内富貴代
  - 依田良子 白田治子 田村恵美子
  - 野呂幸子 糸みち代 高岩由美子
  - 井田すみ 森田矩子 若林有美子
  - 安江恵津 杉原壽子 中村とよ子
  - 西田悦子 青木恵子 神門佐子
  - 柴田幸子 一杉静子 中西トク子
  - 三股まさ子
  - 匿名

発行所 公益財団法人日本YWCA 〒101-0062 千代田区神田駿河台1-8-11 東京YWCA会館302号室  
Tel. 03・3292・6121 Fax.03・3292・6122 office-japan@ywca.or.jp www.ywca.or.jp

編集発行人 実生律子/偶数月1日発行

旬な情報発信しています | メルマガ登録 [y-net@ywca.or.jp](mailto:y-net@ywca.or.jp) | お名前を送ってください / フェイスブック [www.facebook.com/YWCAJapan](http://www.facebook.com/YWCAJapan)



核兵器禁止条約交渉会議への参加を見送った日本。空席には一羽の折鶴が。「#wish you were here (あなたがここにいてくれたら)」と書かれていた

毎朝の礼拝で聖書に触れ、教師や先輩が語る信仰に感銘を受けた。「良く生きるには」「神様が愛ならば、なぜ広島に原爆を...」などと皆で語り合ったという。学院にゆかりの日本基督教団広島流川教会には谷本清牧師がいた。生涯にわたって反核・平和運動家であった谷本牧師は、敗戦後いち早くアメリカのメディアを通して原爆被害の実態を世界に訴え、路上で暮らす被爆孤児やケロイドを負った少女たちの救済活動に奔走していた。「愛と行動の伴う信仰」を説き、自ら実践するその姿は、サーローさんに大きな影響を与えた。



長年協働してきた「核兵器廃絶国際キャンペーン (ICAN)」がノーベル平和賞を受賞。ペアトリス・フィン事務局長(右)と臨んだ授賞式では、母親の着物を仕立て直したドレスを着た

核兵器の終わりの始まり

ローさんは頷きながら聴いていた。

2017年3月、国連本部で「核兵器の禁止に関する条約(以下、核兵器禁止条約)」の交渉会議が始まった。サーローさんはその初日に演説を担った。アメリカやイギリスなどの核保有国とその核の傘下にある国は、直前に会議への不参加を表明。唯一の戦争被爆国である日本もそれに従った。空席が目立つ議場で、それでも、ゆっくりと力強く被爆を語り、広島と長崎で殺された幾十万の霊もここで会議の成り行きを見守っていると訴えた。

「どうか最善を尽くしてください。私たちが被爆者は信じています。この条約は世界を変えられると」  
複数の外交官がサーローさんの元に集まり握手を求めた。出席者の一人はこう語っている。  
「私たちは数字や統計で語りますが、セツコは自分の言葉で語ります。これは人間

出会いが道を拓いた

して16歳の12月に洗礼を受けた。

サーローさんは高校時代からYWCA部で活動していた。広島女学院大学に進学後はその活動を通して、広島大学の森滝市郎教授と交流した。後に原水爆禁止運動の世界的リーダーとなる森滝から学んだことは、「人類をおびやかす核兵器を告発し、絶対平和を実現する思想」だったという。教会の奉仕活動を通して、後に夫となるカナダ人ジム・サーローさんと出会っている。当時彼は関西学院大学で英語を教える宣教師だった。

アメリカからトロントへ

1954年3月、ピキニ環礁で行われたアメリカの水爆実験によって、第五福竜丸の乗員が被爆した。サーローさんが渡米したのは、その夏のことだった。留学先のバージニア州の大学に到着してすぐに、地元の記事から水爆実験について意見を求められた。サーローさんは率直な思いを語り核実験の停止を訴えた。その発言が新聞に掲載されると、「真珠湾攻撃を仕掛けたのは日本だ」「日本へ帰れ」などと批判する手紙が相次いだ。元敵国の国民感情を知り沈黙することも考えたが、しかし「生き残っ

の問題なのだ」と気づかせてくれるのです」

7月7日、交渉会議の最終日。122カ国・地域の賛成をもって条約が成立した。投票の行方を見守っていたサーローさんは大きな拍手をしながら、涙を拭いていた。スピーチを求められると、喜びと感謝を語り「これは核兵器の終わりの始まり」と言っ

諦めるな、光が見えるだろう

2018年11月、サーローさんは広島女学院大学の招きを受けて来日し、「キリスト教主義女子教育と平和〜私が受け取ったもの、あなたに託したいもの〜」と題して講演した。かつて、「愛と行動の人」を志し、核廃絶と平和を推進する人生の土台が形成された母校で、若い世代にバトンを託したのだった。

さらに、核兵器禁止条約の批准を訴えようと安倍首相に面会を申し込んだが、叶うことはなかった。他方、広島知事や市長



西村康稔内閣官房副長官へ安倍首相宛の手紙を手渡し。会談中「政府は市民を守る責任があるから、核兵器を禁止できない」と言う副長官に反論した

た者として語り続ける」と決意した。留学期間を終え、ジムさんと結婚してトロントへと移り住んだ。初心を貫きトロント大学の大学院で社会福祉の修士号を取得。その後、二児を育てながらトロントのYWCAでソーシャルワーカーの一步を踏み出した。家庭の主婦たちが政治や社会を学ぶプログラムを企画するなど、女性が知識を得て決定権をもって生きるために支援した。仕事の傍ら、教会で被爆証言をしてきた。当時のカナダの人々は原爆に対して関心が低く、「他人事」と捉えているようだった。そもそも教育現場で触れることがなかったという。

被爆者として北米に生きる

1970年からトロント市教育委員会に勤めた。ソーシャルワーカーとして、問題を抱えた子どもたちの対応を学校側と協議した。家庭にも関わり、孤立しがちな母親の話を聴くこともあった。やがて、教師たちから教育現場で被爆証言を求められるようになった。喜んで応じる半面で「こうした教育は個人の教師に委ねられるのではなく、教育制度全体が責任をもって取り組むべきだ」と考えたサーローさんは、教育委員会の理事の説得に努め、カリキュラムの見直しなどの制度の改革に貢献した。こうした意志決定機関に働きかける姿勢は、その後の核廃絶運動にも表れることになる。

聴かなければ、届かない

移民の多い北米の市民たちは多様な背景



あり得たはずの人生を、原爆によって奪われた広島女学院の学友や先生351名。全員の名前を記した布を広げて「一人ひとりの命の重み、死の意味を理解してほしい」と訴えた

を持つている。高校や大学で広島を語るたびに、東アジアにルーツを持つ若者から反発があった。立場の異なる人々に対して、歴史的にも人道的にも届く証言でなければならなかった。サーローさんは主張する以前に「彼らの痛みに耳を傾ける」ことにした。相手の痛みに心から共感してこそ、心を動かしてくれるのだという。  
ニューヨークの高校で行われた集会の様を伝えるNHKのテレビ映像がある。スピーチを終えたサーローさんが「もっと話しましょう」と呼びかけると、一人のアジア系の女子生徒が手を挙げた。  
「日本によって殺されたのは誰ですか? ほとんどが罪のないアジアの人々です。あなたが受けた被害とどちらがより深刻だと思えますか?」  
「命を失うことに違いなどありません。殺される命に変わりはないのです。中国、日本、朝鮮半島の人も。広島と長崎について語るときに私が大切だと思うことは、日本が被害者でもあり加害者でもあるという意識です。どちらが悪いという問題ではありません。殺りくそのものが悪なのです」  
集会が終わると、サーローさんは女子生徒に駆け寄り「質問ありがとうございます。泣き出しそうな彼女の背中をさすって、  
「あなたを動揺させてしまいましたか?」  
「いいえ、あなたはきちんと答えてくれました」  
「ありがとう」  
その後、生徒は何かを熱心に語り、サー

に真剣に生きて。そして、その確信した考えを周りの人に話す。よく聴いてよく考える。自分の幸せのみを追求するのではなく、平和、安全、公正な社会をつくりだす責任がある。沈黙することでは実現しません」  
「私はもうすぐ87歳です。私の思いを語ってください。若い方たちにその責任を託したいと思います」  
「13歳のとき、くすぶるがれきの中から光に向かって動き続けました。今、私たちの光は核兵器禁止条約です。広島を壊滅が私に聞いた言葉を繰り返したいと思っています」  
諦めるな。動き続ける。押し続ける。光が見えるだろう。そこへ向かって這っていき

構成 編集部

との面会、高校生との対話集会などを通して、一人でも多くの人に呼びかけた。そのメッセージは一貫していた。  
「皆さんにお願いです。核兵器禁止条約は発効されなければなりません。一人ひとりがこの問題を学び、アクションを起こしてください。皆さんは有権者として投票できます。国会議員に働きかけることができます。安倍首相を動かすことができます」  
「若い方たちは、自分の考えを持つため

(出典) 「生きて―被爆者サーロー節子さん」(中国新聞)、「光に向かって進め サロー節子祖国へのメッセージ」(核なき世界へことばを探る)(NHK)、特別講演「キリスト教主義女子教育と平和〜私が受け取ったもの、あなたに託したいもの〜」(広島女学院大学)、特別プログラム「Living in North America as Nuclear Weapon Survivor」(国際文化会館)

# YWCAの 東日本大震災被災者支援

## 一人 ひとりの

# 「物語」に耳を傾けていく

決断も生活も異なる  
それぞれの物語

東日本大震災直後の緊急支援の現場で、私たちは福島に住む一人の女性と出会いました。被災した彼女はこんなことを打ち明けました。

あの日は、中学3年生だった息子の卒業式の日でした。サッカーが大好きだった息子は、福島県内のサッカー強豪高校に合格、夢いっぱいでした。私は夫とともに息子に避難を説得しましたが、納得しませんでした。入学を夢見て猛勉強したこと、親友はその学校でサッカーを続けようとしているのに、なぜ自分だけが逃げるのか。結果、「子どもが決める」ことを尊重して避難を断念し、放射能汚染に細心の注意を払いながら福島で生活しようという決断をしました。私たちはこうするしかなかったのです。この先のことはわかりません。

被災者は、数で報道されます。しかし、避難すること、留まること、その決断と生活の仕方には、一

東日本大震災による東京電力福島第一原子力発電所事故から8年目を迎えます。今も多くの人が故郷の地を離れ、家族やコミュニティと分断され、放射能汚染と将来に対する不安を抱えながら避難生活を続けています。

日本YWCAは、2011年3月11日に生まれた子どもたちが20歳になるまで少なくとも7300日間を共に歩むことを決意し、中長期の支援活動を続けています。

人ひとりに人生を揺さぶられた「物語」があります。私たちが支援を続けるにあたって大事にしているのは、その「物語」に耳を傾け続けることです。本当の意味で寄り添うこと、必要な支援への気づきも、そこから始まるのです。

### 3つの柱の活動で 女性と子どもたちを支援

日本YWCAの福島における被災者支援は、子どもと女性たちを対象に3つの活動を柱としています。被災地から離れた地で保養する「リフレッシュプログラム」と「セカンドハウス」、そして福島への拠点「カーロふくしま」の活動です。

### リフレッシュプログラム Refresh Program

学校の長期休暇を利用して子ども達が自然の中でのびのびと遊ぶ数日間のプログラムです。日本各地のYWCAが提供する、安全な食べ物と、海で泳ぎ草むらら転げまわって過ごす時間が子どもたちの身体を癒し、心の栄養にもなっています。

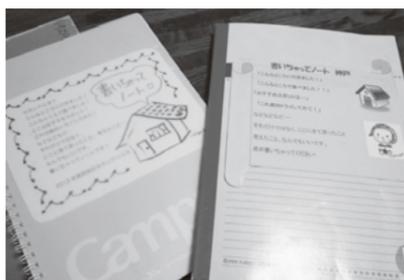
親たちは、子どもとは別プログラムで、支援者たちと交流を深めます。子どもたちが寝た後に、親たちだけの時間を設けることもあります。家の中では話せない悩みや不安を打ち明け合い、共に泣いたり笑ったりするひとときを過ごします。

### セカンドハウス Second House

親子や仲間だけで気兼ねなく滞在したい人のための宿泊場所を、3日以上2週間以内で提供しています。現在、函館・横浜・名古屋・神戸で展開。「遠くの親戚の家」のようにありたいと願って、大家さんや近隣のYWCAボランティアが最寄駅まで送迎したり夏は到着する前に部屋を涼しくしたり、食事に招いたりすることもあります。その交わりが心の支えとなって、繰り返し訪れる家族もいます。

「セカンドハウス」には、利用者が自由に書き込めるノートを用意しています。一人の女性の声を紹介します。

子どもたちは当時小学生、私のような母子世帯は、仕事を捨てて地元を離れる選択肢などありませんでした。年離れた両親もいます。自分たちだけ避難をすることもできなかつたのです。当時、県外へ避難できた家庭は、経済的にも蓄えがあり、家族の理解も得られたなど、いろいろな条件が整っていた



セカンドハウスに設置されているノート

住の高校生たちを対象に、再生可能エネルギーについて学び、出会う、考える体験型プログラムを実施しています。エネルギーの勉強を続けるために大学の工学部に進学した人もいます。



「ふくしまから考える新しいエネルギー」で高校生たちがイベントを開催

### カーロふくしま Caro Fukushima

「カーロふくしま」は福島駅の近くに借りた一軒の家の名前であり、そこで展開する活動を指します。「カーロ」はイタリア語で「親愛なる」という意味。それぞれの理由で福島に留まることを決めた福島的女性たちが親しみ集う場です。

小児科医などを招いて母親たちと共に語り合うお話し会、安全で安心な食材のマルシェ、女性と子どもの身体と心をサポートするワークショップなど、さまざまなプログラムを行っています。

原発事故から8年が経過した今、精神面を含めた支援の継続が課題となっています。避難したくてもできなかった人、これから避難を考えている人、避難先から戻ってきた人、福島には戻らないと決めた人……さまざまな立場の人々がいます。突然の原発事故によって放射能被害にさらされる理不尽という痛みを共に負ったはずの友達や近所のコミュニティに、立場の違いによって生じた心の分断は、年を追うごとに深刻さを増しています。不安を抱えたまま孤立している人に、いつでも心と身体を解放できる居場所があることを、覚えていてほしいと願っています。

構成 編集部

※この記事は、福島での原発事故被災者を支援するドイツの団体が主催した支援対策会議で日本YWCAがスピーチした内容を再構成したものです。



「カーロふくしま」を会場に女性や子どもを対象にした多彩なプログラムを実施しています(写真は福島YWCA)



海や川での水遊び、キャンプ場での野外料理など、地域の特徴を生かしたプログラムを用意しています(写真は名古屋YWCA)



地域YWCAが企画実施する「リフレッシュプログラム」では貴重な外遊びを満喫(写真は福岡YWCA)

# Palestina

## 「ユース国際会議」に参加して 見た、聞いた、 パレスチナのリアル

2018年の秋、パレスチナYWCA主催ユース国際会議「ユースが参加しユースが決める：自由と正義にむけて」に出席しました。そこで見てきたパレスチナの現状、そこに住む人々のリアルを紹介します。



伝統的な刺繍が施された民族衣装をまとったパレスチナYWCAのユースたち

### 70年前のナクバ (大災厄)

「聖書の舞台」として知られるパレスチナでは、キリスト教、ユダヤ教、イスラム教が長く共存していました。19世紀以降、ヨーロッパで不遇を強いられたユダヤ人の国家建設をめざす「シオニズム運動」の中で多くのユダヤ人が移住し、土地の収奪とパレスチナに住む人々の排除が進められてきました。特に1948年に起こった「ナクバ (大災厄)」では、シオニストの軍事組織によって500以上の村が破壊・占拠され、1万人以上が殺害され、イスラエルが建国されました。75万人以上のパレスチナ人が難民となり、今も故郷に帰ることができずにいます。ユダヤ人入植地の拡大、入植者による家屋や街の占拠などによって、土地の収奪と分断は現在も続いています。



パレスチナ人のガイド。生まれも育ちも難民キャンプという。背後の肖像画は、この家から連行された若者を記念したもの



パレスチナ人の行動を制限するために建てられた「分離壁」の落書き。解放や自由を願うパレスチナのリアルな声が反映されている

### ユースの人権も脅かされる

2018年、平和構築におけるユースの役割を強調する国連安保理決議をもとにユース国際会議が開催され、各国のYWCAからユース337名を含む516名が集結。出入りを封鎖され空爆を受けているガザのユースたちもビデオ中継で参加しました。「教育を受けても働き口がない」「12年間、議会選挙が行われず選挙権がないも同然」などの状況が共有され、ユースの声を反映することの重要性が強調されました。1人のユースは、がんを患っていた兄弟が、不当な逮捕・拘禁のために治療を受けられず、命を失った経験を語りました。デモや抵抗運動への参加、SNSへの投稿などを理由に、10代の子どもを連行することも日常茶飯事です。

### 日本にも共通する課題

日本政府はパレスチナに多額の支援を行っています。イスラエルの人権侵害に対して強い姿勢をとっています



ヘブロン市街。武装したイスラエル兵が行き交うのは日常の光景だ

ん。近年は特に、経済・軍事面で日本とイスラエルとの接近が懸念されています。パレスチナで今起きていることは、日本に住む私たちにとって遠い国の他人事ではありません。住民の明確な意思を封殺して辺野古に軍事基地建設が進められる沖縄の状況は、パレスチナと共通する構造を持った問題であることを示しています。私たちの立場がどこにあるか、何ができるのか、より多くの人が考えるためのきっかけとなるよう今後も発信を続けます。

日本YWCA職員 小笠原純恵



日本YWCAは毎年8月に「ひろしまを考える旅」を実施しています。若い世代と共に「核」のない平和な世界の実現をめざして、多世代・多文化の背景をもつ参加者がひろしまで学ぶ体験型の平和学習です。2021年には50周年を迎えようとしています。

「出会い」は私たちの目を、心を、  
真実に向けて開かせる

「ひろしまを考える旅」が始まったのは1971年。広島・長崎の記憶が遠のき、原子力の平和利用が叫ばれ、各地に原子力発電所が建設・運転を始めたころでした。その前年1970年、YWCA全国総会で「『核』否定の思想に立つ」を重要課題に掲げました。平和利用も含めて否という姿勢は、「核」を頂点とした現代文明のあり方、自分たちの生き方を問い直す決意でもありました。

この理念を行動に移す一歩として翌1971年、被爆の真実に直接触れようと日本YWCA常任委員を中心に広島の地を訪れました。そこで原爆の課題に取り組む方々から直接話を伺ったことでそれまで知り得なかった「ひろしま」と出会ったそうです。

以降も旅は続けられ、全国から多くの会員が参加しました。教師に連れられて参加する中高生が年々増えたため、1974年から「中高生ひろしまを考える旅」が企画されました。若い人たちが被爆者から直接体験を聞くことは、それまでの知識や想像をはるかに超える生きた学びでした。以来、中高生と一般参加者が共に平和を考え、互いに意見を交わし、学び合う場となりました。

この旅に長く携わってきた東京YWC A会員の渡辺峯さんは、こう記述しています。

「被爆者の方々をはじめ実に多くの方が証言者・講演者・リソースパーソンとして、企画・相談の段階からかわり助けてくださった。(中略) 言い尽く



第6回目の旅には全国から24名の中高生が参加。現地でのひろしま問題に取り組む広島商業高校からも多数参加した(1974年)



被爆の体験を語る表情、声、空気を  
感じながら聴き入る

せぬ感謝と共にこれらすべての方々との出会いを思う。「出会い」は私たちの目を、心を、真実に向けて開いてくれる

平和な社会をめざす  
リーダーシップを育成

半世紀にわたって続けてきた旅は、戦後一貫して非核・非戦を訴え続けてきたYWCAの揺るがぬ「平和への取り組み」の象徴です。

現在の旅では、日本全国から多世代の人々が、そして中国・韓国YWCAからのゲストたちが夏の広島に集い、資料館見学、碑巡り、フィールドワークや被爆者証言を経験します。それぞれの想いや感想はワークショップで共有し、議論を深めていきます。参加者は原爆の被害の実相だけでなく日本の加害の歴史とも向き合うのです。

旅の準備は日本YWCA・広島YWC A・呉YWCAの協働で行われ、公募の大学生インターンやボランティアリーダーが自ら企画を考えて実施する「リーダーシップ養成」の役割も担っています。また、旅を通して課題に気がついたユースたちは、さらなる旅を求めて国際プログラムに参加するなど、全国で活躍しています。

この旅は50年の節目を迎えるにあたり、大きな課題にも直面しています。

「ひろしまを考える旅」  
過去 現在 未来  
原爆の真実を  
伝え続ける



# Hiroshima

この旅の最大の特徴は、講演やフィールドワークを通じて被爆者一人ひとりの「生の言葉」に触れることにありますが、戦後70年以上が経ち、被爆した人々から直接体験を聴くことが非常に困難になっています。

今後、被爆者証言の継承の方法や試み、新たなモデルの構築が求められます。今年は中学・高校YWCAの生徒を対象に実施します。新たなフィールドワークのコースを開拓するなど、次の50年へ向けた歩みを進めていきます。

日本YWCA副会長 吉田亜希

ひろしまを考える旅—  
50年の軌跡特別展を開催!

「ひろしまを考える旅」は2021年に50周年を迎えます。これに先立ち、これまでの旅の歩みを振り返る特別展を実施します。核をめぐる半世紀、また実践的な平和学習の資料としても有効です。

日時 2019年3月11日(月)~31日(日)  
※休館日あり

会場 NCC教育部平和教育  
資料センター(東京・早稲田)

入館料 500円

問い合わせ

日本YWCA 電話03・3292・6121

詳細は日本YWCA公式サイト・SNSで随時お知らせします

<http://www.ywca.or.jp>